

# 擬似自動詞の派生について

## —「イチゴが売っている」という表現—

田川 拓海

キーワード：擬似自動詞、無対他動詞、動作主、アスペクト、状態性

### 1. はじめに

最近、次のような表現<sup>1</sup>が日本語母語話者によって使用されることがある。

- (1) イチゴが売っている。
- (2) 今日買い物に行くと氷砂糖が売っているのを見つけた。

「売る」は他動詞であるから、「[対象]ガ～他動詞（以下 Vt と略す）テイル」という形式をとる上のような表現は許容されないはずである。例えば同じ他動詞でも、次の(3)(4)のような文は完全な非文である。

- (3)\*穴が掘っている。(cf. 太郎が穴を掘っている。)
- (4)\*ドアが開けている。(cf. 太郎がドアを開けている。)

しかし、このような表現について「単なる言い誤りによる格の誤用として処理してしまうには出現の頻度が高く、一つの定型構文として成立してしまっているものである」（又平(2001):93）という指摘がある。

又平(2001)はインターネット検索を利用した調査を行っている。それによれば、「が売る」「が売り」「が売られ」「が売って」「が売っている」「が売ってある」「が売っていない」のいずれかを含む例は 672 例存在し、そのうち「[商品が]」となっていると解釈可能な例は 104 例存在したという。そしてその例はすべてテイル形であったという。実際、筆者はこの表現を許容するし、日常生活においてもよく耳にする。

又平(2001)ではこのような表現を「商品として存在する」ということだけを表現する自

---

<sup>1</sup> 本稿では、このような表現を「擬似自動詞」と呼ぶことを提案する。しかし、用語自体が問題の表現の派生過程と密接な関係にあるので、その詳しい定義はその派生過程が提案される 3.1 節で与え、それまではこの用語を用いることはしない。また、この用語を英訳した場合、全く同じ名称を持つ”Pseudo intransitive”という用語がすでに先行研究において存在するが、本稿でいう「擬似自動詞」はそれからは完全に独立した概念である。

動詞的表現が必要になったため、本来他動詞である「売る」を自動詞のように使用してしまった結果生じるのではないかと論じているが、その詳しい成立過程については言及していない。

また、又平(2001)はこのような現象が起こる動詞を「売る」に限定して考察しているが、鈴木(2001)によれば「売る」以外にもいくつかの限られた動詞がこの「[対象]ガ～Vt テイル」という形式を許すという。例えば次のような表現である。

- (5) あ、ドアに何かメモみたいなものが貼っている。
- (6) 市の図書館には言語学関係の本があまり置いていない。

鈴木(2001)でもインターネット検索による調査が行われ、(5)(6)のような表現がかなりの頻度で使用されることが明らかにされた。さらに、鈴木(2001)によれば他のいくつかの動詞について「[対象]ガ～Vt テイル」という形式が許されるだけでなく、この形式が使用される動詞と使用されない動詞が規則的に分類できるという。これはすなわち、「[対象]ガ～Vt テイル」という形式を可能にする何らかのメカニズムが存在しているということを示唆している。

本稿ではまず、「売る」という動詞について上述の本来非文法的であるはずの形式がなぜ可能となるのかということについて分析し、それが日本語の動作主、アスペクト、状態性などの文法規則に即した形で成立可能となっていることを明らかにする。そしてその分析が鈴木(2001)で指摘された(5)(6)のような表現にも敷衍できることを示す。

## 2. 現象の諸特徴

この節では問題の表現を可能にする重要な統語的特徴を三つ挙げる。

### 2.1 自動詞文との類似性

まず挙げられるのは自動詞文との類似性である。

- (7) a. 太郎が花子にイチゴを売っている。  
b. イチゴが売っている。
- (8) a. 太郎がおもちゃを壊している。  
b. おもちゃが壊れている。
- (9) a. [動作主]ガ [対象]ヲ V(transitive)  
b. [対象]ガ V(intransitive)

(7a)のような通常の「売る」の表現と(7b)の表現は、構文という観点から見ると、(8a)と(8b)の対応、すなわち(9)のような自他の対応に類似している。

## 2.2 スル形の欠落

次のような対応を見てみよう。

- (10) a. おもちゃが壊れた。  
b. おもちゃが壊れている。
- (11) a. \*イチゴが売った。  
b. イチゴが売っている。

(10a)(10b)のように、通常の自動詞文にはもちろんテイル形でない文も存在する。それに対して(11a)(11b)のように、問題の表現はテイル形でしか使用されることはないのである。

## 2.3 動作主の存在

三つ目の特徴として動作主の存在について考えてみよう。日本語における動作主の存在の仕方には主に次の三つが挙げられる。

- (12) 太郎がおもちゃを壊した。  
(13) おもちゃが太郎に壊された。  
(14) 窓に簾がかけてある。

動作主は典型的には(12)のように動作動詞の主語として存在する。また、受動文においては(13)のように「に」あるいは「によって」でマークされる随意的な要素となっている。そして最後は「テアル構文」である。テアル構文は形式的には実現できないが、統語構造に動作主は存在していると考えられる。それは「わざと」といった[動作主]の意図性を表す副詞をつけることが可能なことから支持される（影山(2000)）。(16)において「わざと」は文中には存在しない動作主の意図性を表している。このため影山(2000)では表現には現れないものの、テアル構文の統語構造には動作主が存在しているとしている。

- (15) 窓には（\*太郎 に／によって）簾が掛けてある。  
(16) 窓にはわざと簾が掛けてある。

では、問題の表現においてはどうかであろうか。結論から言えば、「[対象]ガ～Vtテイル」という表現の統語構造には動作主が全く存在しないのである。その証拠を二つあげよう。

- (17) \*太郎がイチゴが売っている。  
(18) \*イチゴがわざと売っている。

まず、(17)に見られるように、このような表現は決して「[動作主]ガ[対象]ガ～Vt テイル」という形をとって現れることはない。さらに、テアル構文と違って「[対象]ガ～Vt テイル」という表現には「わざと」を共起させることができない。

このような事実から、「[対象]ガ～Vt テイル」という表現においては統語構造に動作主が潜在的にすら存在していないということがわかる。

### 3. 擬似自動詞

本節では第2節で挙げた特徴をもとに、「[対象]ガ～V t テイル」という表現が成立するメカニズムについて考察する。

#### 3.1 記述的分析

まず、問題の表現が表している、意味的な特徴を考えてみよう。

- (19) a. 太郎がイチゴを売っている。
- b. イチゴが売っている。

(19a)が[動作主]である「太郎」が商品を販売している、という表現であるのに対して、(19b)は「イチゴ」が「売られている」という状態でそこに存在している、という状況を表していると言える。そこで、問題の「[対象]ガ～Vt テイル」という表現が表す意味は次のようにまとめることができる。

- (20) 対象の状態に焦点を当て、対象がある状態で存在しているということを表す。

日本語において状態性がヴォイスの転換を引き起こすことはよく指摘されてきたが、この現象もその一種であると考えることができる。そして、2.3 節で論じた動作主の存在という観点から捉えると、この「[対象]ガ～Vt テイル」という表現の詳しい派生過程が明らかになるのである。

「テイル」は日本語において最も分布の広い状態化形式である。「[対象]ガ～Vt テイル」という表現においてはこの「テイル」によって文が状態性を帯びるようになっていると考えることができる。しかし、そこで一つ問題が生じる。それは、「テイル」が「動詞句の中の最主要名詞句、いわば“主語”の指示対象の状態を表す」(金水(1994))という性質を持っている、ということである。具体例を見てみよう。

- (21) 太郎が走っている。
- (22) 太郎がおもちゃを壊している。
- (23) おもちゃが壊れている。

(24) おもちゃが壊されている。

(21)のような非能格自動詞文をテイル形にすると、主語が動作主であるため進行相の解釈となる。これは主語の状態を表しているということである。また、(23)の非対格自動詞文のように主語が対象であると、結果相となる。これも主語の状態を示している。また、動作主と対象が共起する(22)のような他動詞文でもやはり、主語である動作主の状態を表し、文の解釈は進行相となる。さらに、他動詞に直接受動化を行うことによって主語に対象を持ってくると(24)のように解釈は結果相となる。このように金水(1994)の主張はテイルの性質に関する妥当な記述的一般化である(奥田(1978)、金水(2000)も参照)。

従って、下の(25)のように、単純に「売る」が形成する他動詞文をテイル形にしてもその文の主語は動作主なので進行相にしかなりえず、対象の状態を表してはいない。これは(26)のように単に表面上動作主を消しても変わらない。

(25) 太郎がイチゴを売っている。

(26) イチゴを売っている。

(26)は依然進行相のままであり、対象の状態を表してはいない。対象の状態を記述する文になるためには、「テイル」の性質上、主語位置に対象がきていなければならないのである。そして実際、「[対象]ガ～Vtテイル」という表現においては2.3節で見たように主語位置にあるはずの動作主が統語構造から削除されており、対象がガ格でマークされている。これはすなわち「[対象]ガ～Vtテイル」という表現は所有文や状態述語文のように、状態性によって目的語がガ格でマークされるというようなヴォイス転換が起こっている(柴谷(1978)を参照)場合とは違い、直接受動文や非対格自動詞文のように、主語位置を対象が占めているということを示していると考えられる。そしてその結果、対象の状態を表すことができるようになっていたのである。ここで以上述べた分析を下にまとめよう。

(27) 「[対象]ガ～Vtテイル」という表現においては

- a. テイル形によって状態化されている。
- b. 動作主が統語構造から削除され、主語位置に対象がある。

という二つの条件によって「対象がある状態で存在している」という対象の状態を表すことが可能になっている<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> 厳密には、動作主が削除された場合にどのようなメカニズムで対象が主語位置にすることができるといふことについても説明が必要であると考えられる。候補としては非対格自動詞文の分析によく使われる移動分析(影山(1996)を参照)を適用することという方法が有力であると考えている。しかし、その適用にはいくつかの理論的な枠組みの導入が必要となるので本稿ではこの点についてはこれ以上踏み込まない。

この分析によって、一見日本語の文法から逸脱しているように見える「[対象]ガ～Vt テイル」という表現が、その統語構造や状態性、テイル形の性質というまさに日本語の文法の規則に即した形で可能になっているということが明らかになった。

また、この派生は「テイル」という形式に支えられてしか成立することができない。そのためこの操作によって生み出される動詞を「擬似自動詞」と呼ぶこととする。

## 3.2 状態性と動作主の削除

3.1 節の分析においては「動作主が削除される」というプロセスが重要である。しかし、現代日本語においてテイル形がヴォイス転換を誘引するということはない。通常は他動詞文にテイルが付加されても動作主が削除されることはない。

ではなぜ擬似自動詞化においてはテイルの付加（による状態化）が動作主の削除を引き起こすことができるのであろうか。この過程についてより明示的な説明がされないと本稿の分析が妥当性を失う可能性もある。本稿では決定的な結論を出すことはできないが、かなりの部分、この問題について明らかにすることができる。

この問題に対するアプローチの手がかりとしてまず、安・福嶋(2000)で提案されている「存在様態」という概念について考えてみたい。

(28) 存在様態：「(ドコドコニ)～ガ、イル・アル」という主体の存在と「ヒト・モノがどのようにあるか」という様態をあわせて表している状態のこと。

(安・福嶋(2000):412)

この存在様態という概念はまさに擬似自動詞文の表している意味と合致する。擬似自動詞文の表している意味とは次のようなものであった。次に(20)を再掲する

(29) 対象の状態に焦点を当て、対象がある状態で存在しているということを表す。

そしてさらに「存在様態とは存在文の表す状態に近い状態であるといえる」(安・福嶋(2000):417)という指摘がある。それはすなわち、「テイル」に含まれている、「イル」の独立性が相対的に高いということでもある<sup>3</sup>。そこで、擬似自動詞文が存在様態に非常に近い意味を表現すること（それに含まれる「イル」の独立性が高いということ）と、動作主が存在し得ないということには何か関連があると考えられるのではないだろうか。

この仮説を裏付ける証拠として二格名詞句との共起という現象を見てみたい。安・福嶋(2000)では次のような提案がなされている。

---

<sup>3</sup> これはアスペクト形式のテイル中の「イル」が存在動詞の「イル」と同じ機能も有しているという主張に直結するわけではない。

- (30) 「主体の存在場所を表す[場所]二格句との共起しやすさ」を、存在様態の典型例であるかどうかの判断基準とする (安・福嶋(2000):413)

<結果相を表している場合>

- (31) a. \*冷蔵庫の中にビールが冷えた。  
b. 冷蔵庫の中にビールが冷えている。  
(32) a. \*机の上に本が破れた。  
b. ??机の上に本が破れている。

<進行相を表している場合>

- (33) a. \*家に子供が待った。  
b. 家に子供が待っている。  
(34) a. \*台所に母が夕食を作った。  
b. \*台所に母が夕食を作っている。 (安・福嶋(2000):414-415)

上に挙げたように、安・福嶋(2000)においては、進行相結果相に関わらずテイル形にすることによって二格名詞句をとれるようになるものとならないものがあることを主張している<sup>4</sup>。この現象を結果相・進行相という観点から動作主の性質という観点から捉えなおすと、擬似自動詞化のプロセスを明らかにする道が開けるのである。次に進行相解釈でありながら場所の二格名詞句をとれるようになるものととれないものの例を挙げよう。

- (35) a. \*家に子供が待った。  
b. 家に子供が待っている。  
(36) a. ??物陰に子供が息をひそめた。  
b. 物陰に子供が息をひそめている。  
(37) a. \*図書館に太郎が勉強した。  
b. \*図書館に太郎が勉強している。  
(38) a. \*校庭に子供達が遊んだ。  
b. \*校庭に子供達が遊んでいる。

ここで両者の間にある重要な相違点とは、(37)(38)が動作主の具体的な進行中の動作を表す文であるのに対して、(35)(36)は動作主の具体的な進行中の動作を表す文ではないと

---

<sup>4</sup> 一方、杉本(1988)は、結果相のテイル形においては二格をとれるようになる場合があるが、進行相の場合にはそれが起こらないとしている。しかし、本稿で提案するように動作主の性質に焦点を当てると、一見相容れない両者の主張は共存可能であることが示せる。また、日本語のテイル形と場所二格の共起については Iwamoto and Kuwabara(1997)、岩本(2001)などにも興味深い提案があるが、これらの問題に詳しく立ち入ることは本稿の射程を越えるため、稿を改めて論ずることとする。

いうことである。

(35)(36)は確かに進行相か結果相かという二分法のもとでは進行相ととれるかもしれない。しかしこれらは比較的「動作的」(杉本(1988))である典型的な進行相と違い、むしろ森山(1988)の「維持」というものにほぼ相当し、相対的に結果相に近づいている。すなわち同じ進行相でも動作主が具体的な動作を表さない非典型的な動作主であれば、場所の二格名詞句と共起できるようになるのである<sup>5</sup>。

すなわち、動作主の存在、場所の二格名詞句の共起、存在様態、イルの独立性の間には次のような関係があるということである。

(39) 動作主の存在	: 有	無
場所の二格名詞句の共起	: できない	できる
存在様態	: 非典型的	典型的
イルの独立性	: 低い	高い

←————→

ここで重要なのは、イルの独立性が高く、存在様態的であればあるほど動作主の存在が許されないということである。では問題の擬似自動詞ではどうであろうか。

- (40)a. \*駅前のお店に太郎がイチゴを売った(売った相手ではなく場所句としての解釈で)。  
b. 駅前のお店にイチゴが売っている。

「売る」は通常場所の二格名詞句はとれない。しかし、擬似自動詞化すると場所の二格名詞句をとれるようになるのである(又平(2001))。ここから擬似自動詞が存在様態の典型例であるという上述の分析が支持されるとともに、擬似自動詞が次のような性質を持っているということも予測される。

- (41) a. 擬似自動詞のテイルは「イル」の独立性が高い。  
b. 動作主の存在が許されない。

これで上で述べた、「擬似自動詞文が存在様態に非常に近い意味を表現すること(それに含まれる「イル」の独立性が高いということ)と、動作主が存在し得ないということには何か関連があるのではないだろうか」という仮説の妥当性が高いことが示されたであろう<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> 動作主という意味役割が程度性を持ち、いくつかの意味素性に分解できること、「具体的な動作」という概念が動作主性に関して重要であることについては田川(2001)を参照

<sup>6</sup> ここでは、擬似自動詞と存在様態を表す文の構文間の対応関係を示すにとどまってしまっている。擬似自動詞の分析のためにはこれ以上の説明が求められるが、この問題についての明示的な説明は現段階ではまだ行えないのでこれ以上立ち入らない。



## 4. 擬似自動詞化を許す動詞、許さない動詞

前節までは擬似自動詞化の例として「売る」という動詞に限定して分析を行った。しかし第1節でも触れたように、鈴木(2001)によって「売る」以外にも「[対象]ガ～Vtテイル」という形式を許す動詞が存在し、さらにそれを許す動詞と許さない動詞が意味的なクラスによって区別されることが指摘されている。

では、これらの表現も「売る」という動詞と同様に、すなわち「擬似自動詞化」という派生を仮定することによって説明できるのであろうか。本節ではやはりこれらの表現も「擬似自動詞」であり、「売る」の場合と同様の過程を経て派生されるものであることを示す。さらに擬似自動詞化を許す動詞と許さない動詞があるという事実もこれまでに分析してきた擬似自動詞の特徴から自然に説明できることを示す。

### 4.1 設置類と生産類

ではまず鈴木(2001)の調査結果を概観してみよう。鈴木は無対他動詞で擬似自動詞の表す意味(20)になじみそうな動詞類を早津(1989)の分類から二つ選び出し、インターネット検索による調査を行っている。その二つの動詞類とは「設置類」と「生産類」である。その結果を次にまとめよう(下表は鈴木(2001)をもとに筆者が簡単にまとめなおしたものである。詳しい調査結果は鈴木(2001)を参照)。

【表1】鈴木(2001)の調査結果

設置類	割合(該当数/総数)	生産類	割合(該当数/総数)
置く	64%(128/200)	書く	3%(19/500)
貼る	58%(116/200)	組む	2%(8/400)
塗る	13%(21/158)	掘る	3%(4/138)

((該当数/総数)とは(「対象ガ～Vtテイル」形式/「ガ～テイル」形式)にあたる)

このように設置類の動詞は「[対象]ガ～Vtテイル」という形式を許しやすいのに対して生産類の動詞は「[対象]ガ～Vtテイル」という形式をきわめて許しにくい。

まず設置類の動詞、特に表で高い割合を示した「置く」「貼る」がとる「[対象]ガ～Vtテイル」という形式が、擬似自動詞文であるということを明らかにする。そのためには、それらの文が第2節で挙げた擬似自動詞文の3つの統語的特徴を持つことを示せばよい<sup>7</sup>。

しかし、これらの文を内省で許容する話者はほとんど存在しない。そこで、鈴木(2001)の調査結果からその特徴をみる。下で非文であるとしている例は鈴木(2001)が採集した

<sup>7</sup> さらに存在様態の典型例であるかということも検証できればよいのであるが、「置く」「貼る」ともにもともと場所の二格名詞句をとるので、(30)のテストにかけることはできない。しかし、「[対象]ガ～Vtテイル」という形式になった場合に場所の二格名詞句が共起不可能になるということはないので本稿の分析に対する重大な支障とはならない。

「[対象]が～Vt テイル」という表現中に 1 例も存在しなかったという事実を基にしている。

<自動詞文との類似性>

- (42) a. 筑波大学は図書館に古書をたくさん置いている。  
b. 図書館に古書がたくさん置いている。
- (43) a. 太郎がドアにメモを貼っている。  
b. ドアにメモが貼っている。

<スル形の欠落>

- (44) a. \*図書館に古書がたくさん置いた。  
b. 図書館に古書がたくさん置いている。
- (45) a. \*ドアにメモが貼った。  
b. ドアにメモが貼っている。

<動作主が統語構造に存在しない（動作主の顕在不可能性、「わざと」テスト）>

- (46) \*筑波大学が図書館に古書がたくさん置いている。  
(47) \*太郎がドアにメモが貼っている。  
(48) \*わざと図書館に古書がたくさん置いている。  
(49) \*わざとドアにメモが貼っている。

このように、全ての点について「売る」の擬似自動詞文と同じ特徴を示す。これは鈴木(2001)で指摘された「置く」「貼る」などの例が擬似自動詞文であることを強く示していると考えられる。

では、なぜ同じ無対他動詞でも、設置類は擬似自動詞化を許し、生産類は擬似自動詞化を許さないのであろうか（擬似自動詞文が表す意味（(20)）だけを考えれば生産類が擬似自動詞化しても不思議ではない）。この事実は、各動詞クラスの特徴と本稿で提示した擬似自動詞化のプロセスから説明することができる。

- (50) 太郎は一時間机の上に本を置いた。  
(51) 太郎は一時間ドアに注意書きを貼った。  
(52) 太郎は一時間字を書いた。  
(53) 太郎は一時間穴を掘った。  
(54) 太郎は一時間イチゴを売った。

上の例では時間副詞の解釈が設置類では動作の完了からの時間が一時間、生産類では動作を継続して行う時間が一時間という解釈になる。すなわち、設置類は動作の結果状態に焦点を当てることが容易であるが、生産類は動作の過程に焦点が当たる。そのため、生産類は「動作主を削除する」というプロセスを持つ擬似自動詞化を許さないのである。

しかし、このような説明では、上述のようなテストで生産類と同じ解釈が出る「売る」が擬似自動詞化を許すのか、ということが問題となる。本稿では「売る」は別の理由から動作主の抑制が可能になっていると考える。すなわち、「売る」は生産類の動詞と違って、「売る」という一つの具体的な動作が存在するわけではない。例えば、「売る」ための動作を何もしなくても、値札が付いているだけでそのモノを「売っている」ことになるのである（「書く」ではその動作をやめてしまうともはや「書いている」ことにはならない）。そのため、たとえ動作主を抑制しても「売る」という事態が成立しうるのである。このように、「売る」の動作主は生産類よりも抑制されやすいため擬似自動詞化を許すと考えられる。

以上、この節では鈴木(2001)の調査結果について分析を試みた。結果として、「売る」以外に「[対象]ガ～Vt テイル」という形式を持つ例も擬似自動詞という本稿の分析で説明できること、擬似自動詞の成立の可否が各動詞クラスの特徴と3節で得られた擬似自動詞文の特徴から自然に説明できることを示した。これは擬似自動詞化が「売る」という動詞だけに完全に限定された現象ではないこと、何らかのメカニズムに従っているということを示すとともに、前節までの分析の妥当性に対する傍証になると捉えることができる。

## 4.2 「売る」と設置類

上でも述べたとおり、「売る」は早津(1989)で授受類とされているように、「貼る」などの設置類と全く同じ性質を持つ動詞ではない。実際、擬似自動詞化した後も両者には違いが見られるのである。ここではその違いについて考察してみたい。なぜならある点であまりにも違う性質を示すならば両者を違う現象として捉えるという可能性も出てくるからである。両者の相違点で最も顕著なものは次の現象であると考えられる。

(55) 駅前の八百屋でイチゴが売っている。

(56)\*教室で掲示物が貼っている。

(57)\*自分の部屋でつぼが机の上に置いている。

「売る」の擬似自動詞文は場所のデ格と共起するのに対して、設置類の動詞の擬似自動詞文は場所のデ格と共起できないのである。しかし、これは両者の動詞の意味構造の違いから説明することができる。まず、すぐ思いつく両者の差異とは、設置類の動詞の擬似自動詞文が結果相解釈であるのに対して、「売る」の擬似自動詞文が進行相解釈であるように感じられるということである。しかし、次のようなテストを行ってみよう。

(58) 今、太郎は歌っている最中だ。

(59)\*今、イチゴが売っている最中だ。

(60)\*今、おもちゃが壊れている最中だ。(結果相解釈で)

これは金水(2000)で提案された進行相に対するテストであるが、(59)に見られるように、擬似自動詞文は進行相とは同じ結果を示さないのである。よって、「売る」の擬似自動詞文を進行相解釈だと言うことはできない。実際、直感的にも「売る」擬似自動詞文の解釈は「販売中である」という状態が維持されているという「維持」(森山(1988))に最も近いと考えられる。一方、設置類系擬似自動詞の解釈は結果相と考えてよいであろう。

ここで場所デ格は「事態の存在する場所」であるということを考えれば、両者の差異は自然に説明することができる。設置類、例えば「貼る」を例にとると、「メモが貼っている」という状態は「貼る」という事態が終了した後の結果の継続である。従って、何らかの事態を表す文ではないから場所デ格とは共起し得ない。一方、「売る」の擬似自動詞文が表す商品が「販売中である」という状態を維持するためには、たとえ動作主が存在しなくても、その対象を販売物たらしめている影響力の維持が必要となる。それが一種の事態であると捉えられるために場所デ格との共起が可能となっているのである。

このように、「売る」と設置類の動詞それぞれの擬似自動詞文には「テイル」に関する解釈とそれに関連して場所デ格との共起可能性に対して違いが見られる。しかしこれは擬似自動詞文の表す中核的な意味である「対象の状態に焦点を当て、対象がある状態で存在しているということを表す」という点には影響を及ぼさないと考えられる。すなわち両者の違いは動詞の意味の違いに起因しており、擬似自動詞化という統一的な派生を仮定する捉えかた自体には何ら影響を及ぼさないと考えられる。

また、「売る」擬似自動詞文がかなり安定してきている現象であるのに対して、設置類系の擬似自動詞が内省ではまだほとんど許容されないという事実も、両者の動詞の特徴から説明することができる。

(61)??イチゴが売ってある。

(62) メモが貼ってある。

(63) つぼが置いてある。

上の例に見るように、擬似自動詞化になりやすい「売る」はかなり文脈を整えなければテアル構文になじまない動詞である。逆に、テアル構文に良くなじむ「貼る」「置く」は相対的に擬似自動詞化しにくい。

テアル構文と擬似自動詞文は統語構造に動作主が潜在しているかという点で違いはあるものの、動作主を抑制し、対象にガ格を付与するという点でほとんど同じ機能を持っている。そして、テアル構文になじまない「売る」は擬似自動詞化しやすいのに対して、テアル構文になじむ設置類の動詞はわざわざ擬似自動詞化という手段をとらなくてもよいのである。

このような点が「売る」と設置類の現象としての安定性の差異を生み出していると考えられる。すなわち、設置類の動詞は原理上擬似自動詞化が可能なのであるが、それと競合

する形式であるテアル構文の存在があるため、まだ現象としては安定しないのである<sup>8</sup>。

## 5. おわりに

本稿では「イチゴが売っている」という文に代表されるような表現が散発的な慣用表現や誤用ではなく、確かに規範文法から見ると特殊な表現ではあるものの、日本語の文法の規則に従った形である一定の意味を表現していることを示した。しかし問題点もまだ多く残されている。

まず、取り扱う表現が非常に不安定な現象であるということが挙げられる。この現象に対する内省が個人間で非常にゆれるのである。「売る」の擬似自動詞文は許容する話者でも「貼る」「置く」などは全く許容しなかったり、「売る」についても「眼前描写」や「総記のガ解釈」というような限定条件をもとに許容する話者も存在するようである。また、不安定な現象であるためか何らかのテストにかけるために複雑な文にすると内省が難しくなるという側面も見受けられる。

そのために又平(2001)、鈴木(2001)のようなインターネット検索による用例採集が効果的なのであるが、このような方法については近年その有益性ととも多くの問題点も指摘されている(鈴木(1999))。鈴木(2001)で指摘されているようにこの現象がまだ「逸脱的な表現であると意識されるためか、公の場では使用されにくい」という性質を持っているために、追跡調査を行うにしてもインターネット検索などを有効に使用する必要があるのであるが、それには多くの問題がついてまわることになるであろう。

擬似自動詞はこの先、特定の場面を表すことができる手段としてさらに安定していくのか、それとも既存の表現との対比の上で、逸脱した表現として次第に使われなくなっていくのであろうか。この現象を分析することで、日本語の文法について新しい角度からの知見が得られるだけでなく、言語が変容していく様子をリアルタイムで観察することができる貴重な機会を得られるであろう。今後も考察を続けたい。

### 【参考文献】

安平鎬・福嶋健伸(2001)「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系—アスペクト形式の分布の偏りについて—」筑波大学『東西言語文化の類型論プロジェクト研究成果報告書平成12年度IV PART I』pp.407-436

早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』16:8 pp.353-364

---

<sup>8</sup> 本稿では擬似自動詞化をヴォイス転換の一種であると捉えた。しかし、このような性質は本来テアル構文に見られるものである。また、テアル構文と擬似自動詞文がほぼ相補分布のような関係にあるという事実から、擬似自動詞化がテアル構文の代わりに機能しているのではないかという可能性が考えられる。

すなわち歴史的に見れば、擬似自動詞化が坪井(1976)において指摘されたような「テイル」の「テアル」領域に対する侵食という現象に何か関連しているのではないかということが推測されるのである。しかしこれは簡単に論じられる問題ではなく、紙幅の都合もあるため本稿では示唆にとどめ、今後の課題とする。

- 岩本遠億(2001)「進行相とニ格後置詞の認可について—概念意味論による接近法—」『COE 形成基礎研究費研究報告(5)「先端的言語理論の構築とその多角的な実証」』 pp.33-60 神田外語大学
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎(2000)「自他交代の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』 pp.33-70 ひつじ書房
- 金水敏(1994)「日本語の状態化形式の構造について」『国語学』 178 pp.101-107
- 金水敏(2000)「時の表現」金水敏、工藤真由美、沼田善子(著)『日本語の文法 2 時・否定ととりたて』 pp.3-92 岩波書店
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版
- 又平恵美子(2001)「「イチゴが売っている」という表現」『筑波日本語研究』 6 pp.93-102 筑波大学 文芸・言語研究科 日本語学研究室
- 三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実(編)『日英語比較選書 7 ヴォイスとアスペクト』 pp.108-186 研究社出版
- 三宅知宏(1996)「日本語の受益構文について」『国語学』 186 pp.91-104
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- 奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」『教育国語』 53,54
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』 大修館書店
- 杉本武(1988)「「動詞+ている」の表すアスペクトについて」『論集ことば』 pp.101-115 くろしお出版
- 鈴木敦典(1999)「言語資料としてのインターネット・サーチエンジンの利用—その問題点と可能性—」『言語科学』 34 pp.61-76 九州大学言語文化部言語研究会
- 鈴木由奈(2001)『「イチゴが売っている」等に見られるガ格表現について』 筑波大学日本語・日本文化学類卒業論文
- 田川拓海(2001)『日本語における「に」の多義性—起点的意味役割を中心に—』 筑波大学日本語・日本文化学類卒業論文
- 竹沢幸一(1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』 pp.59-81 くろしお出版
- 坪井美樹(1976)「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』 pp.537-560 表現社
- Iwamoto, Enoch and Kazuki Kuwabara. (1997) “On the aspectual property of locative inversion and the status of PP”, 『COE 形成基礎研究費研究報告(1)「先端的言語理論の構築とその多角的な実証」(1-A)』 pp.51-59 神田外語大学